

定名詞句に関わる指示の不透明性の一考察

中 田 智 也

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 命題的態度を表す動詞の補文中に定名詞句が現れるとき、それらを含む文全体が指示的に不透明な文脈を形成することがある。Cole (1978) では、詳細に検証されるならば、この現象は実際には指示の不透明性ではないとの主張が為される。本稿では、Cole (1978) の議論の問題点を指摘し、その批判的検討を契機として、この現象の背後には、「定名詞句の属性的用法」と「参与者の知識状態」という二重の要因が並存していることを示す。そして、この二重の要因が、相互にいかなる関係にあるときに指示の透明性が確保され、また、それらがいかなる関係にあるときに指示の不透明性が生じるかを、参与者による推論の問題として分析する。

1. は じ め に

本稿は、「指示の不透明性 (referential opacity)」に関する一定の考察をまとめた試論である。本稿は、Cole (1975, 1978) に主たる着想を得ている。古典的とも言えるこれらの論文には、現代的な観点から眺めてみても、依然として真剣な考察に値する数多くの問題が含まれている。同一の現象を扱うこれらの論文のうち、特に Cole (1978) は、「同一指示表現の置き換え可能性 (substitutivity of coreferential expressions) の原理」¹⁾の例外を除去するという論理学の基礎に関わる問題の解決を主たる目的とするものである。そして Cole (1978) では、指示の不透明性に対する彼の説明が、この目的を達成し得ることが示される。同時に、彼が指示の不透明性の「標準理論」と呼ぶ説明 (Russell (1905), Quine (1953, 1956, 1960), McCawley (1971), Keenan (1970, 1971, 1972), Montague (1974) など) が、この目的の達成にはいささかも貢献をしないことが示される。

さて、Cole (1978) の議論は、その立論において、幾つかの批判的に再検討されるべき問題点を含んでいる。本稿では、これらの問題点を再検討

することにより、指示の不透明性に関する新たな論点を導く。この論点は、出発点となる現象を共有しながら、Cole (1975, 1978) とは異なる方向へと議論を構成するものとなるものである。本稿は、この論点をめぐる問題に、暫定的な解答を与える試みである。

本稿の構成は以下の通りである。2章では、Donnellan (1966) による定名詞句の「指示的用法 (referential use)」と「属性的用法 (attributive use)」を、3章では「指示の不透明性」を振り返る。4章では、Cole (1975, 1978) の (特に Cole (1978) の) 議論の要点を押さえ、その問題点を指摘する。そして、その問題点の検討がどのような新たな論点を導くかを見る。5章では、4章で見る論点をもとに具体的な考察を行う。6章 (おわりに) では、本稿の理論的意義、理論的可能性に言及する。

2. 定名詞句の指示的用法/属性的用法

本章では、Donnellan (1966) にて提案、峻別された、定名詞句の「指示的用法」と「属性的用法」を簡単に振り返る。そして、後の章の議論に

関連する限りで、追加の事項として、定名詞句によって表現される同一性についても触れておく。

次の文を見よう。

- (1) The murderer of Duncan must have been possessed by witches.

まず、(1)の発話者は、定名詞句 the murderer of Duncan について、それが指す対象が、武将 Macbeth であることを知っているものとする。こうした状況で、Macbeth その人を指示する目的で、固有名 Macbeth の代わりに the murderer of Duncan が使用されるならば、この定名詞句は「指示的用法」として用いられていることになる。

以上に対して、次に考えるべきは、(1)が「ダンカン王を殺害したような輩は誰であれ魔女に魅入られたに違いない」という意味で発話されるという状況である。この場合、the murderer of Duncan は、それが誰であれ、ともかくこの記述内容に該当する人物について何かを述べる目的で使用されているのである。こうした定名詞句の使用は「属性的用法」と呼ばれる。属性的用法においては、問題となる定名詞句が誰を（何を）指示するかではなく、あくまでもその記述内容そのものが重要である。例えば(1)において、発話者は、誰が Duncan を殺害したものか、全く見当が付かないとする。こうした状況で(1)が発話されるならば、それは定名詞句の属性的使用の典型例であると言える。一方、発話者は、Macbeth が Duncan を殺害したと信じているとする。このような状況でも、依然として彼は、「ダンカン王を殺害したような輩は誰であれ」という意味で the murderer of Duncan を用いることができる。それを属性的に用いることができるのである²⁾。この場合、定名詞句 the murderer of Duncan は、決して固有名 Macbeth の代わりに用いられている訳ではない。

以上が、定名詞句の指示的用法と属性的用法の簡単な復習である。続いて、定名詞句によって表現される同一性について考察する。次の文(式)を見よう。

- (2) the murderer of Duncan = the murderer of Banquo³⁾

(2)の両辺の定名詞句を指示的用法として解釈した場合、その上で、ある人物（以下、A とする）が(2)の同一性を知っているとはどういうことか。それは、A が、Macbeth その人が Duncan を殺害し、さらには Banquo をも殺害したことを知っている、ということである。

では、(2)の両辺の定名詞句を属性的用法として解釈した場合、その上で、A が(2)の同一性を知っているとはどういうことか。この問いを考えるに当たって、A は、誰が Duncan を殺害し、また、誰が Banquo を殺害したかを知らないものとする。しかし A には、それらの事件が同一の人物による犯行であることは分かっている。(2)の定名詞句を属性的用法としてその同一性を知るとは、こうした状況のことである。

3. 指示の不透明性

本章では指示の不透明性について振り返る。指示の不透明性は、「指示の透明性 (referential transparency)」と対比的に理解されるべきものである。これらの概念は共に、「同一指示表現の置き換え可能性の原理」（以下、「置き換え可能性の原理」とする）に関わるものである。この原理は次のようなものである。同一の対象を指示する二つの表現のうち、その一方が何らかの真である文に表れているとする。このとき、その出現をもう一方の表現で置き換えた結果できる文もまた真である。この原理が成立するような、文の真理値に影響を与えることなく相互に置き換え可能な二つの指示表現は「指示的に透明」と言われる。また、それらの指示表現の置き換えが可能と判断される当の文は「指示的に透明な文脈 (referentially transparent context)」と言われる。具体的には次のように説明され得る。

- (3) Mark Twain = Samuel Clemens

- (4) Mark Twain is the author of *The Adventures of Tom Sawyer*.

- (5) Samuel Clemens is the author of *The Adventures of Tom Sawyer*.

まず、(3) という同一性が成り立っている。(4) は真であり、その中には (3) の左辺の表現が現れている。この表現を (3) の右辺の表現で置き換えた文が (5) である。(5) もまた真であることは、(3) と (4) が真であることにより保証されている。(3)―(5) においては置き換え可能性の原理が成り立っている。つまり、(3)―(5) は指示的に透明な文脈の事例である。

ところで、置き換え可能性の原理が成立しない場合がある。それは次のような場合である。同一の対象を指示する二つの表現のうち、その一方が何らかの真である文に表れているとする。しかし、その出現をもう一方の表現で置き換えた結果できる文が真であるとは限らない。相互に置き換えることが文の真理値に影響を与えるような、つまり、置き換え可能性の原理が成立しないような、同一の対象を指示する二つの表現は「指示的に不透明」であると言われる。また、それらの指示表現の置き換えが真理値に影響を与えると判断される当の文は「指示的に不透明な文脈 (referentially opaque context)」と言われる。具体的には次のように説明され得る。

- (3) Mark Twain=Samuel Clemens
(6) Mary knows that Mark Twain is the author of *The Adventures of Tom Sawyer*.
(7) Mary knows that Samuel Clemens is the author of *The Adventures of Tom Sawyer*.

(6), (7) は、先の (4), (5) を know の補文とした埋め込み文である。まず、(3) という同一性が成り立っている。(6) は真であり、その埋め込み文の中には (3) の左辺の表現が現れている。この表現を (3) の右辺の表現で置き換えた文が (7) である。しかし、ここでは、(3) と (6) が真であることは (7) もまた真であることを保証しない。(3) と (6) が真であっても (7) は偽であり得る。Mary が、Mark Twain と Samuel Clemens が同一人物であることを知らない可能性が考えら

れるからである。このように、(3), (6), (7) は指示的に不透明な文脈の事例である。

指示的に不透明な文脈には幾つかのタイプ⁴⁾が報告されている。以上で見たような、know や believe などの命題的態度を表す動詞が作り出す文脈はそのうちの一つである。

4. Cole (1975, 1978) の 批判的検討に基づく展開

本章では、まず 4.1. 節で、Cole (1975, 1978) の議論を紹介する。続く 4.2. 節では、その問題点を指摘する。4.3. 節では、4.2. 節で指摘した問題点を克服する試みがいかなる論点を導くかを見る。

4.1. Cole (1975, 1978)

Cole (1975, 1978) では、命題的態度を表す動詞の補文中に定名詞句が現れるならば、その属性的解釈が要因となり、指示の不透明性が生じる(指示的解釈は不透明性を生じさせない)との主張がなされる。そして、なぜそのような環境にある属性的定名詞句が指示の不透明性を生じさせるのかということが分析される。両論文のうち、特に Cole (1978) は、置き換え可能性の原理に対する例外、つまり、指示の不透明性を除去するという目的を持つものである。(ここで問題とされる不透明性は、命題的態度を表す動詞の補文中に現れる定名詞句が属性的に解釈される場合に限られる。注 4) で紹介しているような種類の不透明性は議論の対象外である。) 結論として、そうした環境にある定名詞句が属性的に解釈される場合、一見すると不透明性が生じているかに見える現象は、実は、置き換え可能性の原理が破れているのではないことが示される。つまり、この現象は、詳細に検証されるならば、指示の不透明性とは関わりのないものであることが示されるのである。この議論の要点を具体的に見てみよう。

- (8) the best doctor=the shortest boxer

- (9) John believes that the best doctor is a genius.

- (10) John believes that the shortest boxer is a genius.

Cole (1978) では、(8)―(10) の定名詞句が指示的用法として解釈されるならば、それらは指示的に透明な文脈を形成するとされる。このような事例において指示の透明性が確保されるメカニズムを、Cole は次のように説明する。(9) の the best doctor、及び (10) の the shortest boxer が指示的用法として解釈されるならば、(9)、(10) の補文が表す命題は両者一律に (11) となる。

- (11) r is a genius.⁵⁾

この (11) という命題全体を P で表せば、(9)、(10) という文は、両者一律に (12) という同一の命題を表していることになる。

- (12) John believes that P .

(9)、(10) は同一の命題を表すがゆえに、それらの真理値は常に同一である。このようにして指示の透明性は確保されると Cole は言う。

さて、(8)―(10) の定名詞句が属性的用法として解釈されるならば、それらは指示的に不透明な文脈を形成するとされる。その理由は次のように説明される。定名詞句が属性的に解釈されるならば、問題となるものは、その指示対象ではなく、その記述内容である。仮に、問題となる時点において the best doctor である人物が、同時に the shortest boxer でもあったとしても、John の「最も腕利きであるような医者是谁であれ天才だ」という信念が、「最も背の低いようなボクサーは誰であれ天才だ」にまで拡張されることはない。このように、属性的解釈の場合、(9)、(10) の補文は同一の命題を表し得ない。先の流儀に従って、(9)、(10) の補文を一つの記号で表すならば、それらはそれぞれ Q , R と、別個の記号で表されることになる。そして、(9)、(10) という文は、それぞれ (13)、(14) という別個の命題を表していることになる。

- (13) John believes that Q .

- (14) John believes that R .

(13)、(14) は異なる命題であるがゆえに、それらの真理値は同一であるとは限らない。

ここで Cole (1978) の結論部分を要約すると次のようになる。(8)―(10) の定名詞句が属性的用法として解釈されるならば、たとえそれらの外延が同一であったとしても、(9)、(10) の補文は同一の命題を表し得ない。属性的定名詞句は、その記述内容こそが、命題にとって不可欠な部分と見なされるからである。この観点は、属性的定名詞句について、もはやそれ自体を指示表現と見なさないことを含意する。そして、それらを指示表現と見なさないならば、外延の等しい二つの属性的定名詞句は、そもそも置き換え可能性の原理の適用対象ではないことになる。問題の現象が同原理の適用対象でないならば、それは指示の透明性/不透明性とは関わりのないものとなる。こうして置き換え可能性の原理の例外と思しき一つの現象は除去される。

4.2. Cole (1978) の問題点

4.2.1. 第一の問題点

前節で見た Cole (1978) の議論は、置き換え可能性の原理の例外を除去するという目的にとっては有効な解決策であるかも知れない。しかし、この場合に生じる問題点は、属性的に解釈された定名詞句自体の指示表現としての資格が考慮されぬままに放置されることにある。西山 (2003: 68) が言うように、Donnellan による定名詞句の指示的/属性的用法の区別は、あくまでも「指示的名詞句」という一つのカテゴリーにおける下位区分である⁶⁾。属性的定名詞句も依然として指示表現であるという観点に立つならば、置き換え可能性の原理の例外を除去するという特定の目的のために、同原理の適用に際して、外延の等しい指示的定名詞句はその対象とし、外延の等しい属性的定名詞句はその対象外とすることはアドホックな扱いであると言わざるを得ない。

4.2.2. 第二の問題点

Cole (1978) の議論には、その出発点において

既に看過されていることがある。それは、命題的態度を表す動詞そのものが指示の不透明性と密接に関係しているということである。このことは、既に前章の(3)、(6)、(7)の事例で見た通りである。以下に再掲しておく。

- (3) Mark Twain=Samuel Clemens
- (6) Mary knows that Mark Twain is the author of *The Adventures of Tom Sawyer*.
- (7) Mary knows that Samuel Clemens is the author of *The Adventures of Tom Sawyer*.

ここでは、命題的態度を表す動詞の補文中に固有名が現れる場合が問題となっている。これらの事例において不透明性が生じる要因は、Maryが(3)という同一性を知らない可能性があるということである。つまり、不透明性はMaryの「知識状態」によるのであって、決して固有名によるのではない。そうであれば、Cole (1978)が問題とするような、命題的態度を表す動詞の補文中の定名詞句の場合にも、その指示的/属性的解釈とは独立に、言語現象への「参加者の知識状態」が不透明性の一因となっているはずである。Cole (1978)では、指示の不透明性の要因として、この「参加者の知識状態」が完全に見過ごされている。

4.3. 指示の不透明性の二つの要因

4.3.1. 第一の問題点から

本稿の以下の議論では、定名詞句は属性的に解釈されようともそれ自身で一つの指示表現であるとする観点に立つ。このことはつまり、属性的定名詞句も置き換え可能性の原理の適用対象となることを認めることである。ここでは、同原理の例外を除去するというCole (1978)の主たる目的を離れ、その議論の出発点である「命題的態度を表す動詞の補文中の属性的定名詞句は指示の不透明性を生じさせる」という現象の把握に立ち戻る。

4.3.2. 第二の問題点から

まず、指示的定名詞句についてである。Cole (1978)は、(8)―(10)のような事例において、定名詞句が指示的に解釈されるならば指示の透明

性は確保されると言う。しかし、参加者の知識状態を考慮に入れるならば、この分析は明らかに不十分なものとなる。定名詞句の指示的用法は、言わば固有名の代わりである。命題的態度を表す動詞の補文中に固有名が現れる場合に、参加者の知識状態をその要因として不透明性が生じるのであれば、指示的定名詞句の場合にも同様のことが予測される。

次に、属性的定名詞句についてである。4.3.1. 節で述べたように、本稿の以下の議論では属性的定名詞句も一つの指示表現と見なす。そうであれば、(8)―(10)のような事例においては、属性的定名詞句が要因となって指示の不透明性が生じることになる。しかし、これらの事例においては、命題的態度を表す動詞が問題となっている時点で既に、参加者の知識状態を要因として不透明性は生じていると考えられる。よって、命題的態度を表す動詞の補文中の定名詞句が属性的に解釈される場合に生じる指示の不透明性については、「参加者の知識状態」と「定名詞句の属性的解釈」という二重の要因を考慮しなくてはならないことになる。

4.3.3. 論点 —— 指示の不透明性の二つの要因

以上のように、命題的態度を表す動詞の補文中の定名詞句に関わる指示の透明性/不透明性という現象の背後では、「参加者の知識状態」と「定名詞句の指示的/属性的解釈」という二つの要因が複雑に関係し合っているものと思われる。そうであれば、これらの相互関係が検証されなくてはならない。論点は、この二つの要因が相互にいかなる関係にあるときに透明性が確保され、また、いかなる関係にあるときに不透明性が生じるか、ということである。次章ではこの論点に基づいて考察を行う。

5. 考察

本章では、まず5.1. 節で、前章にて論じた不透明性の二つの要因の相互関係を考察し得る枠組みを構築するための条件を設定する。そして5.2. 節で、その条件設定に基づいて具体的な検証を行う。

5.1. 条件設定

初めに、考察対象である事例を再掲しておく。

- (8) the best doctor=the shortest boxer
- (9) John believes that the best doctor is a genius.
- (10) John believes that the shortest boxer is a genius.

まず、Bill は John が次のように発話するのを聞くとする。

- (15) The best doctor is a genius.

この経験から Bill は (9) を発話する。(8) は成り立っており、Bill はこのことを知っているとする。ここで、Bill が続けて (10) を発話することは妥当な推論を経ていると言えるかどうか。これが本稿の主導的な問いである。簡略化して言えば、(8) が成り立っている際に Bill にとって (9) から (10) へと言い換えることは可能かどうか、である。この言い換えが可能であれば、(8)―(10) は指示的に透明な文脈を形成していることになり、不可能であれば、(8)―(10) は指示的に不透明な文脈を形成していることになる。ここで、指示の透明性/不透明性の問題は、推論としての文の言い換え可能性の問題にパラフレーズされたことになる。

この問いに答えるに当たって、定名詞句の指示的用法/属性的用法の区別と、参与者の知識状態を組み合わせた「場合分け」が必要となる。この場合分けを設定した上で、それぞれの場合に言い換えが可能かどうかを検証する。

場合分けは次の要領で行う。まず、Bill が、John の発話である (15) の the best doctor を指示的/属性的のいずれの用法として解釈するか、つまり、Bill が (9) の the best doctor をいずれの用法として使用するかをその始点とする。次にこのそれぞれの場合に対して、Bill が、「John が (8) を知っている」と想定する場合」と「John は (8) を知らない」と想定する場合」を対応させる。この際、(8) の定名詞句は、(9) の the best doctor の

用法と同じ用法として考えるものとする⁷⁾。都合、Bill による推論、つまり、(9) から (10) への言い換えに当たって、以下の4通りの場合を考えることになる。

	Bill による “the best doctor” の用法	Bill による John の知識状態の想定
(i)	指示的	(8) を知っている
(ii)	指示的	(8) を知らない
(iii)	属性的	(8) を知っている
(iv)	属性的	(8) を知らない

5.2. 考察

本節では、前節で設定した (i)―(iv) それぞれの場合において Bill による (9) から (10) への言い換えが可能かどうかを検証する。

5.2.1. (i) の場合

言い換えは可能である。ここでの、Bill による John の知識状態の想定は、「John は、the best doctor も the shortest boxer も、共に (例えば) Frank を指示することを知っている」というものである。この想定のもとでは、Bill がどちらの定名詞句を用いて Frank を指示しようとも、そのことが John の信念に影響を与えることはない。よって、Bill にとって、(9) から (10) への言い換えは可能となる。

5.2.2. (ii) の場合

言い換えは可能とも、不可能とも考えられる。この両義性は、Bill が、the shortest boxer の使用の責任を、自己に帰するか、或いは John に帰するかによっている。ここでの Bill による John の知識状態の想定は、「John は the shortest boxer が、the best doctor 同様に Frank を指示することを知らない」というものである。この想定のもとで、Bill にとって、the shortest boxer を用いて Frank を指示することは、John が知らない方法で Frank を指示することである。

ここで、Bill が、the shortest boxer の使用の責任を自己に帰するとは何を意味するか。それは、John が知らない方法で Frank を指示しようとも、結果的に Frank を指示していることは動かないという判断のもとに、Bill は the shortest boxer を使用する、ということである。そして、正に、結果

的に Frank を指示していることは動かないという理由により, Bill にとって, (9) から (10) への言い換えは可能となる。

以上のことに対して, Bill が, the shortest boxer の使用の責任を John に帰するとは何を意味するか。ここでの Bill による John の知識状態の想定によると, 「John は, the shortest boxer が Frank を指示することを知らない」のである。そうであれば, Bill が, the shortest boxer の使用の責任を John に帰するならば, もはや the shortest boxer は Frank を指示することはできなくなる。そして, 正に, the shortest boxer が Frank を指示することができないという理由により, Bill にとって, (9) から (10) への言い換えは不可能となる。

5.2.3. (iii) の場合

言い換えは可能とも, 不可能とも考えられる。ここでの Bill による John の知識状態の想定は, 「John は, 現実には, ある人物が the best doctor であり, 同時に the shortest boxer でもあることを知っている」というものである。

仮に, Bill が, John の知識状態の想定を背景に, (9) の the best doctor を「最も腕利きの医者であり, 同時に, 最も背の低いボクサーであるような人物は誰であれ」という意味で用いるならば, 言い換えは可能である。この場合, Bill は, the best doctor を, 言わば「最も腕利きの医者であり, 同時に, 最も背の低いボクサーである」という一つの属性の縮約形として用いていることになる。

一方, Bill が, the best doctor を文字通りの属性的用法として, つまり, 「最も腕利きであるような医者是谁であれ」という意味で用いるならば, 言い換えは不可能である⁸⁾。この場合, Bill は, John が信じていることはあくまでも「最も腕利きであるような医者是谁であれ天才だ」ということであると考えている。今, Bill が, John が知っている想定している「最も腕利きの医者であり, 同時に, 最も背の低いボクサーである人物」は, たまたま「最も腕利きであるような医者是谁であれ天才だ」という John の信念に該当しているにすぎない。仮に, 今問題としている人物を凌ぐ腕利きの医者が現れたならば, 「第二の腕利きの医者」は(依然として「最も背の低いボクサー」で

はあるが) John にとっての天才ではなくなる。「最も腕利きであるような医者是谁であれ天才だ」という John の信念が「最も背の低いようなボクサーは誰であれ天才だ」にまで拡張されることはないのである。

5.2.4. (iv) の場合

言い換えは不可能である。ここでの Bill による John の知識状態の想定は, 「John は, 現実には, ある人物が the best doctor であり, 同時に the shortest boxer でもあることを知らない」というものである。この想定のもとで, Bill が the best doctor を属性的用法として用いるならば, Bill にとって, (9) から (10) への言い換えが可能となる余地はない。

6. お わ り に

本稿では, Cole (1975, 1978) に対して, その議論の出発点となる現象を共有し, そして, その議論の問題点を契機として, Cole とは異なる方向へと考察を展開した。

本稿第5章にて展開した考察の全体は, 「命題論理 (propositional logic)」における「整合式 (consistent well formed formula)」の「真理値表 (truth value table)」と顕著な類似性を持つものである。例えば「 $P \wedge Q$ 」という整合式においては, その「要素式 (elementary formula)」である P と Q の取り得る値 (真/偽) の組み合わせは四通りである。そのうち, P と Q が共に真である場合にのみ「 $P \wedge Q$ 」全体は真となり, それ以外の場合には偽となる。しかし, このような真理値表が与えられるだけでは, 実際にこの式が真であるか, 或いは偽であるかを判断することはできない。 P と Q の取り得る値の四通りの組み合わせは, 四通りの世界のあり方 (その内のどれか一つが現実世界である) と対応している。 P と Q , それぞれの要素式の現実世界での値が確認されて初めて, 言い換えれば, それぞれの要素式が現実世界と照合されて初めて, 実際の「 $P \wedge Q$ 」の値が決定される。

さて, 本稿の第5章における考察は, 全て Bill による想定として完結するものである。それは, 与えられた状況に対する Bill による可能な想定

の全体である。問題とする推論（言い換え）が、実際に正しいものであるか誤ったものであるかは、この段階では判断することができない。その判断は、実際の、John の「定名詞句の使用意図（指示的/属性的）」、及び「知識状態（同一性を知っている/知らない）」と照合されることにより初めて決定される⁹⁾。ここでは、Bill による想定 of 全体に対するこれらの値が、整合式の真理値表に対する要素式の値と同様に機能している。このように、外的要因の寄与を待って実際の値が決定されるという点において、本稿の考察は、整合式の真理値表と同一の構造を持つものである。

本稿では、「命題的態度を表す動詞の補文中に現れる定名詞句は指示の不透明性を生じさせる」という現象を、参与者の推論の問題として扱った。本稿にて検証された事例は、believe という動詞と、the best doctor=the shortest boxer という同一性の組み合わせに限られている。この検証の結果の一般的妥当性が確保されるためには、命題的態度を表す動詞と、定名詞句で表現される同一性の様々な組み合わせに対して、同様の検証が行われる必要がある。仮に、そうした十分な検証の結果として、本稿における考察の妥当性が支持されるならば、本稿は、指示の不透明性に関わる複雑な推論に対して、記号論理の如き明確さを備えた形式化が可能であることを示唆するものとなる。

注

- 1) Cole (1975, 1978) では、この概念に代えて「同一物の不可識別性 (indiscernibility of identicals) の原理」が用いられている。Cole (1975, 1978) を解釈する上で、これらの概念を同一視することに差し支えはない。Cole (1975, 1978) では、物のレベルではなく、言語のレベルでの置き換えが問題となっているのであるから、むしろその主旨を明示的に表す「同一指示表現の置き換え可能性」の方が適切であると言える。
- 2) 西山 (2003: 114) は、「特定の人や物が記述内容にあてはまるということを話し手が信じているかどうかは、属性的用法と指示的用法の区別にとって本質的ではない」と言う。本文、及びこの引用は「信じる」という述語を問題としている。しかしながら、(1) の発話者が、Macbeth が Duncan を殺害したことを客観的知識として「知っている」場合は、彼にとって the murderer of Duncan を属性的用法として用いることは難しいように思われる。
- 3) 戯曲 *Macbeth* 中で、実際に Banquo を討つのは、Macbeth その人ではなく彼が差し向けた刺客である。本稿においては、便宜上 (2) の同一性は成り立っているものとする。
- 4) 命題的態度を表す動詞が作り出す文脈以外に、代表的なものとして「引用の文脈」や「様相の文脈」がある。Quine (1953) から順に具体例を引いておく。
 - (i) Cicero=Tully
 - (ii) 'Cicero' contains six letters.
 (ii) の引用符内の Cicero を Tully に置き換えると、その結果は偽となる。
 - (iii) The number of planets=9
 - (iv) 9 is necessarily greater than 7.
 - (v) The number of planets is necessarily greater than 7.
 9 は必然的に 7 より大きい、「惑星の数」は必然的に 7 より大きいわけではない。
- 5) *r* は Cole による記号法である。referent の頭文字を表す。(11) は、自然言語の表現そのものではなく、自然言語の表現 ((9), (10) の補文) が表す命題である。この記号は、(11) という命題の中に、the best doctor、或いは the shortest boxer の指示対象である人物その人が現れていることを表している。Cole はこの記号法について、Kaplan (1978) による *DTHAT* と概において同じものであると言っている。
- 6) 西山 (2003: 59) は「指示的名詞句」を「非指示的名詞句」との対比で捉えている。何らかの名詞句が、これら二つのカテゴリーのどちらに分類されるかは、それが「世界のなかのなんらかの対象を指示 (refer to) するという機能」を持つかどうかによるとされる。たとえ何らかの定名詞句が属性的に解釈されたとしても、それが世界の中の個体について言及しているという点については指示的に解釈された場合と変わらない。このことは、属性的定名詞句も依然として「世界のなかのなんらかの対象を指示 (refer to) するという機能」を有していることを意味している。
- 7) (8) の定名詞句が、(9) の the best doctor とは異なる用法として解釈される状況について考慮する必要はない。そうした状況とはつまり、「John が (15) の the best doctor を指示的に用いて、かつ、属性的用法として (8) の同一性を知っている/知らない」、及び「John が (15) の the best doctor を属性的に用いて、かつ、指示的用法として (8) の同一性を知っている/知らない」という (Bill による) 想定である。前者については、John が (15) の the best doctor を指示的に用いていると想定するのであれば、その段階で、彼による (8) の同一性の知り方を属性的と考えることは不可能である。後者については、(iii), (iv) の状況設定における言い換え可能性が詳細に検証されるならばはや十分であることを指

摘しておく。詳細は別の機会に譲ることにする。

- 8) 一部 Donnellan (1966) に倣い、次のような事例を考えてみよう。

- (i) Smith's murderer=Basil's murderer
- (ii) John believes that Smith's murderer is insane.
- (iii) John believes that Basil's murderer is insane.

Bill は, John が Smith's murderer is insane と発話するのを聞くとする。この経験から Bill は (ii) を発話する。Bill は, John が Smith's murderer を属性的に用いたと考え、なおかつ, John が (i) という同一性を知っていると想定しているとする。この場合, John の「スミス殺害の犯人は誰であれ狂人だ」という信念は、「バジル殺害の犯人は誰であれ狂人だ」にまで拡張され、と考えることは自然なように思われる。つまり、この事例において、この条件設定の下では、(ii) の Smith's murderer は「スミスを殺害し、バジルをも殺害した」という一つの属性の縮約形とする解釈が自然であり、それを文字通りの属性的解釈とすることは難しいように思われるのである。本文の事例と比較して、なぜこのような違いが生じるかを検証することは重要な課題である。ここでは事実を指摘するに止めておく。

- 9) (ii) と (iii) の場合は、この決定のために、照合すべき情報がそれぞれ一つずつ増えることになる。

参考文献

- Cole, P. 1975. "Referential opacity, attributiveness, and the performative hypothesis." *Chicago Linguistic Society* 11, 672-686.
- Cole, P. 1978. "On the origins of referential opacity." In P. Cole (ed.) *Syntax and Semantics 9: Pragmatics*, 1-22. New York: Academic Press.
- Donnellan, K. 1966. "Reference and definite descriptions." *Philosophical Review* 75: 3, 281-304.
- Kaplan, D. 1978. "DTHAT." In P. Cole (ed.) *Syntax and Semantics 9: Pragmatics*, 221-243. New York: Academic Press.
- Keenan, E. L. 1970. *A Logical Base for a Transformational Grammar of English*, Transformations and Discourse Analysis No. 82, Department of Linguistics, University of Pennsylvania.
- Keenan, E. L. 1971. "On Semantically Based Grammar." unpublished paper, Cambridge University.
- Keenan, E. L. 1972. "On a Semantically Based Grammar." *Linguistic Inquiry* 3, 413-462.
- McCawley, J. D. 1971. "Where Do Noun Phrases Come From?" In D. A. Steinberg and L. A. Jakobovitz (eds.) *Semantics*, 217-231. London: Cambridge University Press.
- Montague, R. 1974. *Formal Philosophy: Selected Papers of Richard Montague*, New Haven: Yale University Press.
- 西山佑司. 2003. 『日本語名詞句の意味論と語用論——指示的名詞句と非指示的名詞句——』東京: ひつじ書房.
- Quine, W. V. 1953. "Reference and modality." *From a Logical Point of View*, New York: Harper & Row.
- Quine, W. V. 1956. "Quantifiers and Propositional Attitudes." *Journal of Philosophy* 53, 177-187.
- Quine, W. V. 1960. *Word and Object*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Russell, B. 1905. "On denoting." *Mind* 14, 479-493.
- 清水義夫. 1984. 『記号論理学』東京: 東京大学出版会.

Notes on the Referential Opacity Concerned with Definite Noun Phrases

Tomoya NAKATA

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary A sentence containing a definite noun phrase which is embedded beneath a verb of propositional attitude sometimes forms a referentially opaque context. In Cole (1978), it is argued that given a detailed verification, this case of “referential opacity” is not a referential opacity indeed. In this study I will point out the problems in Cole’s (1978) discussion. Through the critical examination of these problems, I will show two factors of “an attributive interpretation of definite noun phrases” and “the state of knowledge” in a profound consideration of this case. Then I will analyze the relationship of these dual factors in terms of inferences by a participant ; in what relationships referential transparency is caused, and in what relationships referential opacity is caused.